

(2) ヤングケアラーと思われるこどもがいたときの支援までの事例【保育所・学校編】

CASE 1：保育所の妹の送迎を担当する高校1年生女子への支援

- 家族構成：母親、本人、弟（小2）、妹（4歳）
- 本人：弟妹の面倒をみる定時制高校1年生の女子
- 関係機関等：保育所、小学校、高校

気付く

- 保育所から、妹について、「登所時に制服を着せていなかったり、紙おむつがパンパンな状態で登所させたり、母が仕事で送迎できず週に1～2回の登所状況。夜は高校生の姉が、妹と小学生の弟の面倒をみているようだ。」との相談があった。

つなぐ

- 保育所から母に、相談先としてこども相談センターを紹介したのち、保育所が母の了解を得て、こども相談センターから母へ連絡し、母の困りごとを確認した。
- 母は仕事を掛け持ちし、14～22時、7～12時までの勤務であったが、「自分が保育園に送迎できない日は祖母や長女に依頼するから大丈夫。」と話し、当初支援には消極的であった。
- しかし、祖母が入院となったタイミングで母から「祖母が入院予定となり、妹の送迎が難しくなった。長女に負担がかかっており、支援をお願いできないか。」と相談があった。

支援する

- こども相談センターが本人に面接し、「妹を保育所に送迎すること、帰宅後は兄弟の面倒をみなければならず、自分の時間を持ってないことが負担。学校が終わったらすぐに帰宅しなければならないため、部活ができない。」との思いを聞き取った。
- こども相談センターがヤングケアラーヘルパーを派遣し、妹の保育所への送迎や兄弟の朝の身支度等を支援した。
- 小学生の弟は、母が子育て支援課に問い合わせて手続きし、放課後児童クラブへ入所した。
- 母の同意を得て弟の小学校へ連絡し、ヤングケアラーヘルパーが支援していることの情報共有を行ったところ、「忘れ物が多く気になっていた。」と担任から話があった。
- 本人の同意を得て、高校に連絡し、部活の顧問にも家庭の事情を把握してもらい柔軟な対応を依頼した。

見守る

- 本人が部活をして帰宅後に、兄弟が帰宅し、ヤングケアラーヘルパーが翌日の登所登校準備を手伝う生活リズムとなった。
- 保育所、小学校に見守りを依頼し、ヤングケアラーヘルパーが母への連絡の橋渡しを担ったことにより、兄弟の忘れ物が減り、身なりが整うようになってきた。
- こども相談センターは、学校や保育所との情報共有や母との連絡を継続した。祖母の体調回復により、支援頻度を減らす等、家族状況に即した支援をその都度母や本人と相談した。

Point!

- ・チェックリスト（地域編）
IV様式編P11へ！
- ・ヤングケアラー気づきツール
（大人向け）
II活用編P9・IV様式集P2へ！
- ・ヤングケアラー気づきツール
（こども向け）
II活用編P6・IV様式編P1へ！
- ・ヤングケアラーアセスメントツールII活用
編P11・IV様式編P3へ！

Point!

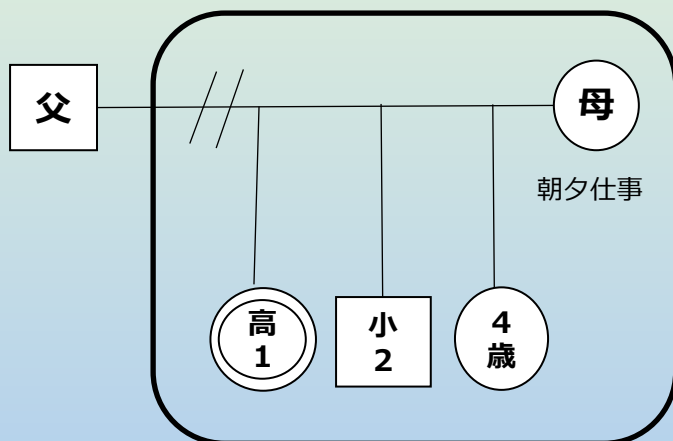
- ・こども相談センター
（ヤングケアラー窓口）
[Tel:076-243-4158](tel:076-243-4158)
- ・子育て支援課
[Tel:076-220-2285](tel:076-220-2285)

Point!

- ・フェイスシート
- ・支援検討シート
- ・支援計画書
IV様式集P12へ！

気付き

ジェノグラム（家族関係図）



<記号の例>

○ = 女性 □ = 男性（本人は二重）

● ■ = 死亡

<配偶者関係> 基本は男性が「左」、女性が「右」

— 婚姻 --- 同棲（内縁） / 別居 // 離婚

<同胞関係>

配偶者を結ぶ横線の下に、年齢の順に左から記入

同居しているメンバーは○で大きく囲む

保育所

小学校

高校

見守り

エコマップ（支援関係図）

